

## パウル・ティリッヒ研究 (VI)

—不安や病とその克服としての救いについて—

森 田 美 千 代

- I 問題の所在
- II ティリッヒにおける不安や病とその克服としての救い
  - (i) ティリッヒの人間観と生命観
  - (ii) 不安
  - (iii) 病
  - (iv) 救い
- III 教育に示唆する諸点

### I 問題の所在

パウル・ティリッヒが発表したほぼ著作順に、パウル・ティリッヒ研究 (I) においては「境界線 (boundary)」について、(II) においては「不安と生きる勇氣」について、(III) においては「愛・力・正義」について、(IV) においては「究極的なかわり (ultimate concern)」について、(V) においては「深さ (depth)」の概念について、今まで考察してきた。今回は、説教集を手がかりとして、「不安や病とその克服としての救い」について、考察を深めたい。

今回の小論は、新たな構想のもとに書いたものであるが、取り扱った内容により、パウル・ティリッヒ研究 (II) の「不安と生きる勇氣」と、結果的に重複する部分があることを最初にことわっておきたい。

さて、私は教育をどのようにとらえているか、その枠組みを、最初に述べておきたい。私は、教育は、人間が学ぶことを通して人間になることに、他の人間がかかわることである、と考えている。ここで取り扱おうとして

いることは、人間が人間になるという場合の前者の人間（現実の姿における人間、疎外の中にいる人間）が、後者の人間（本来の人間）に帰還するというを、不安や病やその克服としての救いとの関係において、明らかにしようとするのである。

筆者が、不安や病やその克服としての救いとの関連において、人間が人間になるということを考察してみようと考えたのは、現代という時代また現代人は不安におびえている・病んでいるとの危機感をいっているからである。このような時代のなかでおこなわれる教育も、例外ではありえない。子どもも教師も、不安や病と紙一重のところできているといわざるをえないからである。自らの中に不安や病をかかえこんで生きているといわざるをえないからである。

テキストを読む視点および本研究のねらいは、前回までと同様に今回においても、(1)まずティリッヒの文脈に即して読み考えること、(2)人間の問題、教育の問題、キリスト教教育の問題への、ティリッヒの貢献と示唆を掘り起こすこと、である。力点としては、後者にある。

テキストとして、『永遠の今 (The Eternal Now)』（1963年）の中の「救い (Salvation)」と「永遠の今 (The Eternal Now)」や『生きる勇気 (The Courage to Be)』（1952年）を主として使用し、そして、必要に応じてその他の論文をも使用する。

## II ティリッヒにおける不安や病とその克服としての救い

### (i) ティリッヒの人間観と生命観

ティリッヒにおける不安や病とその克服としての救いを考察するその前提として、ティリッヒの人間観と生命観とを明らかにしておきたい。

彼は次のようにいう。「私が「生命の諸次元 (Dimensionen des Lebens)」ということを用いるのは、「生命の諸層 (Schichten des Lebens)」という表現を避けるためである。人間は、たとえば身体的、心理的、精神的などの諸層の組み合わせではなく (Der Mensch ist nicht aus verschiedenen Schichten zusammengesetzt, z. B. einer körperlichen, einer seelischen und einer geistigen), 人間は一つの多次元的統一体 (eine vieldimensionale Einheit) である。私が「次元 (Dimension)」という隠喩を用いるのは、人間にあっては生命の諸形式は互いに並んで、あるいは上下に重なってある

のではなく、それらは互いに内在している (die verschiedenen Formen des Lebens liegen nicht nebeneinander oder übereinander, sondern ineinander) ことをこれによって表現するためである。(略) 生命の諸次元のそれぞれのあいだには何ら境界線 (Grenzlinien) がない。人間は一つの多次元的存在 (eine vieldimensionale Einheit) である。(略) 生のどの次元にも、他のすべての次元が、可能的あるいは現実的に現存している。(In jeder Dimension des Lebens sind alle anderen Dimensionen potentiell oder aktuell vorhanden.) (略) 彼は個々の諸層から成り立っているのではなく、すべての次元が一つになっている統一体である。(Er besteht nicht aus einzelnen Schichten, sondern ist eine Einheit, in der alle Dimensionen vereint sind.)<sup>1)</sup> ここで確認しておくべきことは、第一に、ティリッヒは、人間を、層的存在としてとらえているのではなくて、次元的存在としてとらえているということである。(フランクも、人間を、層的存在としてではなくて、次元的存在として、とらえている。) 第二に、しかも、その次元的存在は、各次元が分離されているのではなくて、お互いに関連し合って統一されている、とティリッヒは考えている。第三に、さらに、身体的、精神的の二次元的存在としてではなくて、少なくとも身体的、心理的、精神的の三次元的存在として、人間をとらえているということである。つまり、従来、人間を身体的、精神的に二分したりあるいは人間を身体的、精神的の二次元的存在と考えがちであったが、そのように考えると身体の方は問題がないとしても、何を指して精神とどうか問題がたえずつきまとうことになる。人間の心理的な内実を指して精神といつているのか、あるいは人間の魂のことがらつまり主として宗教のことがらを指して精神といつているのか、である。そのところを身体 (body, Leib), 心理 (soul, Seele), 精神 (spirit, Geist) と三つに区別することによって、混乱と曖昧さを、ティリッヒはなくしているといえるのである。

次に、ティリッヒの生命観について、述べておきたい。彼は、次のようにいう。「すべての生命過程は二つの基礎的要素、すなわち自己同一 (Selbst-Identität) と自己変化 (Selbst-Veränderung) とを含む。内的平衡を保つ中心ある自己は、自身を越え、部分的には自己自身との統一から離れるが、しかし同時にその同一性を守り、分離した部分を全体に同化させようとする。自己超出 (Über-sich-Hinausgehen) と自己帰還 (Zu-

sich-Zurückkehren) とは、生をそのあらゆる次元—原子の構造、植物の生長、動物の発達、精神の創造的力、歴史の力動性—において特徴づけている。これを生命過程の弁証法 (eine Dialektik der Lebensprozesse) と呼ぶことができよう。」(As. 288, A'p. 280) このことを、すぐあとの所では「生命の両義性 (die Zweideutigkeit des Lebens)」といている。すなわち「両義性とは、いかなる創造的過程にも破壊への傾向があり、いかなる統合的過程にも分裂への傾向があり、またいかなる崇高なものへの衝迫のなかにも世俗化への傾向があるということの意味する。」(As. 289, A'p. 281)

以上のようなティリッヒの人間観と生命観は、これから考察しようとするティリッヒの不安や病とその克服としての救いと密接にかかわってくるといえるのである。

(ii) 不安

ティリッヒは、不安を二つにわけている。実存的不安 (existential anxiety) と病的不安 (pathological anxiety, non-existential anxiety) である。実存的不安を、彼は、さらに、三つにわけている。運命と死の不安、あるいは存在的不安 (the anxiety of fate and death), 罪責と断罪の不安、あるいは倫理的不安 (the anxiety of guilt and condemnation), そして、空虚と無意味の不安、あるいは精神的不安 (the anxiety of emptiness and meaninglessness) である。「われわれは、非存在 (= 無) が存在を脅かす三つの局面に応じて、不安の三類型を区別することができる。無は、人間存在の存在的自己肯定 (ontic self-affirmation) をば、相対的には運命という仕方において、絶対的には死という仕方において、脅かす。無は、人間存在の精神的自己肯定 (spiritual self-affirmation) をば、相対的には空虚さという仕方において、絶対的には無意味性という仕方において、脅かす。無は、人間存在の倫理的自己肯定 (moral self-affirmation) をば、相対的には罪責という仕方において、絶対的には断罪という仕方において、脅かす。これら三つの脅かしの自覚が、不安の三つの形態としてあらわれる。」<sup>(2)</sup>

ティリッヒ自身は哲学者にして神学者であるが、彼の思想は、心理学の方面においては、Rollo May (Existential Psychology) などに、教育学の方面においては、Phillip H. Phenix などに、影響を与えている。それは、フェニックスが *Realms of Meaning* の中で、次のように述べていることか

らも、その影響が端的にわかる。「パウル・ティリッヒは、三つの主なる不安の源泉を、見い出している。最初の不安は、存在的不安で、これは人間の有限性の事実から生じる。人は、死ななければならないことを知っているの、不安なのである。(略) 第二の不安は、罪責から結果する不安である。自ら、罪人であることを知っているの、不安なのである。意識的にあるいは無意識的に、人は、道徳法を破ったことに気づいている。(略) 第三の不安は、自分が、無意味によって脅かされているのに気づく不安である。人は、どんなに議論しても追いつくことのできない懐疑に包囲され、そして、答えを見い出すことができない問いを問い、さらに、その問いはさらに深い混乱と逆説を導くだけである。」<sup>(3)</sup>

以上、簡単に、実存的不安の三つの型について述べてきたが、実存的不安は実存的であるのだから、とりのぞかれることはできないのであって、それらは自己自身が引き受けなければならないものなのである。正常な人間においては、事実、それらの実存的不安は、自己自身引き受けることができるものなのである。引き受けることができない時に、以下に述べる病的不安が生じてくることになるのである。

病的不安について。ティリッヒによれば、病的不安とは、「特定の条件のもとにおける実存的不安の一つの状態である。」(Bp. 65, B'p. 75) 「病的不安とは、(中略) 実存的不安を引き受けることができないという状態なのである。」(Bp. 74, B'p. 84) 繰り返すならば、病的不安は、実存的不安を自己自身へと引き受けることに失敗した結果として生じる。運命と死の実存的不安との関連でいえば、運命と死の病的不安は、非現実的安全性 (an unrealistic security) をつくり出し、罪責と断罪の実存的不安との関連でいえば、その病的不安は、非現実的完全性 (an unrealistic perfection) をつくり出し、空虚と無意味の実存的不安との関連でいえば、その病的不安は、非現実的確実性 (an unrealistic certitude) をつくり出す。(Bp. 77, B'p. 87) <sup>(4)</sup>

この病的不安が、次に述べる病のなかの一つであり、従って、治療(救い)の対象となるものである。

### (iii) 病

ティリッヒの人間観のところで、私は、ティリッヒは、人間存在を、身体的、心理的、精神的次元の統一体としてとらえている、ということ

べた。ということは、病にも、身体的次元の病、心理的次元の病、精神的次元の病があり、そして、それぞれの次元の病は、他の次元の病から独立している病ではなく、他の次元と深くかかわっている病であるということになる。このことをまず確認しておきたい。

まず、身体的次元における病について。身体的次元における健康とは、人間の身体のあらゆる部分とその機能を正しく果たすことを意味する。従って、この次元における病とは、この機能の障害である。従って治療はこの場合、まず、外科手術によって患部を除去するか、取り替えるかすることにほかならない。これは、デカルトの人間観（人間とはよく機能する機械であり、その故障部分はこのを取り除きまたは取り替える。）に基づくのである、とティリッヒはいう。（As. 290～s. 291, A'p. 283～p. 284）さらに、この次元における病の治療は、化学的薬剤（鎮静剤や興奮剤）によってもなされる。さらに、この次元の治療は、上述のように身体の一部ではなくて、環境との関係における有機体全体の治療がある。例えば、休養または運動、食物の摂取、気候、仕事の変化、身体的・精神的刺激などである。（As. 292, A'p. 285）

心理的次元における病について。私は、さきに、ティリッヒは、人間のあらゆる次元において、健康状態においては、生命過程は自己同一と自己変化をバランスを保ちながら繰り返すととらえている、ということ述べた。しかし、そこには常に二種類の危険が生じることも、ティリッヒはつけ加えている。「第一の危険は、自己自身を越える超出において自己を失い、再び自己に戻れないという危険である。これは個々の過程が全体から分離し、あまりに多くの方向に分散する場合に起こる。その結果はあやまった成長であり、統一的中心の喪失 (der Verlust der einenden Mitte) である。この場合 (例えば人格の分裂を結果として伴う特定の身体的疾病と精神病) においては、同一性が脅かされ、またしばしば失われる。この危険の認識とそれに対する反動とが逆の危険を生む。自己を失うという不安のなかで、人間はもはやあえて自身を越えて自己を変えることをしない。おそらく彼はかつてそのことを試みたが、前記のような仕方でも失敗したために、彼の実存の制限された限界内に引っ込んだのである。ここで彼は彼の縮小した同一性を守ることができ、そして単に守るだけでなく、それを発作的に防衛する。（これは精神神経症の場合である。）」（As. 288, A'p. 218 および

As. 292, A'p. 285) 別の箇所において、ティリッヒは次のようにもいっている。「危険を決して冒さず、過ちを決して犯さぬ者は、その全存在において過ちを犯しているのである。」<sup>9)</sup>

この心理的次元において、特に、自己同一と自己変化との拮抗が明らかになる、とティリッヒは考えている。従って、この次元における病は、自己同一と自己変化との不均衡によるといえるのである。この次元の治療は、主として精神分析家による場合が多い。

精神的次元における病について。ティリッヒは、「精神 (der Geist)」ということばを「生命の意味 (der Sinn des Lebens) を求め、倫理、文化、宗教における価値 (Werte in der Moral, der Kultur und der Religion) を創造する。」(As. 293, Ap. 286) という意味で用いている。

この精神的次元のなかでも、特に宗教的次元における健康は、「神的靈にとらえられていること (das Ergriffensein vom göttlichen Geist)、また神的靈の現前性の経験 (die Erfahrung seiner Gegenwärtigkeit)」(As. 294, A'p. 287) であり、(これこそ、ティリッヒのいう「信仰」である。) この宗教的次元における病とは、偶像崇拜と狂信と自己破壊的エクスタシスとを強いる一つの具体的な宗教的教義の奴隷になること (個人としてあるいは教会の一員として) である。しかしまた、あらゆる宗教的諸形式の突破もまた病気である。」(As. 294, A'p. 287) 別の箇所では、次のようにもいっている。「宗教的アピールに対し熱狂的に反応することは、(略) 疑ってみる必要があるものである。(略) こういう仕方において宗教は、潜在的ノイローゼ的状态をむしろ守り強めたりするかもしれないのである。」(Bp. 73, B'p. 83) 宗教的次元における治療は、牧師あるいは司祭の任務である、とティリッヒはいう。

(ii) であげた、実存的不安と病的不安のうち、病的不安が治療の対象となるが、(実存的不安は、病ではないから、健康な人であるならば、実存的不安を、自分自身のうちに引き受けることができるのである。) そのなかの運命と死の病的不安は、主として心理的次元の病であるといえようし、罪責と断罪の病的不安および空虚と無意味の病的不安は、主として精神的次元の病であるといえよう。

(iv) 救い

これまで、私は、現代という時代および現代人をおおっている不安や病

について述べてきたが、そして、その際、その克服としての治療にもある程度入りこんでしまったが、ここで、その不安や病の克服としての「救い (salvation)」について、考察を深めたいと思う。

ティリッヒは、『永遠の今』という説教集の中で「救い」と題する説教をしている。<sup>(6)</sup> それによれば、「救いは病からの癒しであり、また救いは、隷従の状態からの救出でもある。そして、この二つのことは結局同じことである。(Saving is healing from sickness and saving is delivering from servitude; and the two are the same.)」(Cp. 114, C'p. 268) とティリッヒはいう。すなわち「救い」は、癒しであり、解放である、ということが出来る。このことは重要なことである。救いには、病からの治療と罪からの解放の両者が含まれているのである。「人間イエスを象徴的に救い主 (治療者) (Heiland) としていいあらわすことができたという事実は、宗教的治療 (すなわち隷従の状態からの解放 筆者) と医学上の治療 (すなわち病の治療 筆者) (religiöses und medizinisches Heilen) とが根本では一つであることを示す。救済 (Erlösung) を治療 (Heilung) として理解するならば、医学と神学とのあいだに衝突はなく、内的結びつきがある。ただこの結びつきを忘れてしまい、救済を人間が天上のある場所へ昂揚されることだとみなす神学だけが医学と矛盾しうる。また生理学的次元にとっての非生理学的次元の意味を否定する医学のみが、神学との矛盾に陥りうる。しかし諸次元の区別もその相互的貫通も理解されるならば、神学と医学とのあいだの矛盾は止揚され、治療を職務とするあらゆる人びとの共働が可能になる。」(As. 296, A'p. 290~p. 291) 別の箇所では、「救済は原理的に、またその本質に従っていうと治療であり、分裂、分解、崩壊していた一つの全体の回復である。(Erlösung ist grundsätzlich und ihrem Wesen nach Heilung, die Wiederherstellung eines Ganzen, das zerbrochen, zerstört, desintegriert war.)<sup>(7)</sup>」ともいっている。

ところで、聖書には、癒しの物語が多く出ている。大別すれば、次の三つのタイプが考えられる。その一つは、身体の病にかかっている者が直接癒される場合、身体の病をもつ者がまず罪をゆるされ、それから癒される場合、悪鬼に憑かれたと呼ばれていた状態から救い出される場合である。(Cp.116, C'p.271)

このことと、(i) および (iii) であげた、ティリッヒの人間観と生命観



および身体的次元での病・心理的次元での病・精神的次元での病とをかかわらせるとしたら、身体の病にかかっている者が直接癒される場合は、身体的次元での病が身体的次元の病の形をとってあらわれ、それが身体的次元で癒される場合であり、身体の病をもつ者がまず罪をゆるされそれから癒される場合は、心理的ないしは精神的次元の病が身体の病の形をとってあらわれ、それが身体的次元においてそして心理的次元、精神的次元において癒されたということが予想されるし、悪鬼に憑かれたと呼ばれていた状態から救い出される場合は、精神的次元の病が精神的次元の病の形をとってあらわれ（つまり、病的不安の形をとってあらわれ）、それが精神的次元で癒されたといえるように思う。

しかし、救いは病からの癒しでありまた隷従の状態からの解放でもあると前述したことを想起すれば、身体的次元の救いは他の心理的精神的次元の救いとのかかわりをもちながら生じるといえるし、また、心理的次元の救いは、同様に、他の身体的精神的次元の救いとのかかわりをもちながら生じるといえるし、また、精神的次元の救いも、身体的心理的次元の救いとのかかわりをもちながら生じるといえるのである。「治癒は三つの水準で起こる。すなわち医学の水準と心理療法の水準と宗教の水準である。(Heilen vollzieht sich auf drei Ebenen: der medizinischen, der psychotherapeutischen und der religiösen.) これらの三つの水準は区別されなければならない。しかしそれらは相互に分離されてはならない。それらは原則的に、意味のうえでは区別されるが、治癒の過程そのものにおいては結合されている。<sup>8)</sup> ティリッヒは、そのことを「次元における完全な治癒は他のすべての次元における治癒なしには不可能であることを示す。」(As. 295, A' p. 289) といっている。

以上のように、身体的次元の救い、心理的次元の救い、精神的次元の救いは、お互いに関連し合っているので、多次元的統一的人間存在とのかかわりにおいて治療がなされることが大事なこととなるが、もちろん部分的治療もある。しかし、その場合も、次のことを視野に入れておく必要があることを、ティリッヒは指摘する。「諸他の次元を顧慮せずむしろそれを危うくさえするところの部分的治療 (teilweise Heilung) がある。手術の成功は心理的外傷を結果として伴うこともありうる。効き目のある薬は落ち着かない良心を静め、そしてこの仕方によって病的な道德状態を持続状態

にすることがありうる。運動競技によって鍛練された身体が神経症的性格を宿していることがある。精神分析によって癒された患者が、彼の生に意味が欠けているために靈魂においては依然として病気であることがある。」(A.s. 295, A' p. 289)「部分的治療は不可避ではあるが、しかしそれは、他の諸次元における疾病を生み出す危険をうちに蔵している。それゆえにさまざまな分野における治療の職務に従事する人びとの共働が必要である。」(A.s. 296, A' p. 290)

それ故に、ある次元における治療が、他の次元における病をうみださないためには、そして、どの次元においても健康であるためには(逆にいうと、病でないためには、また、病になっても癒しがおきるためには)、ティリッヒは、究極的なかわり(すなわち、ティリッヒのことばでいえば、「信仰」)を経験していること、また、人格を大切なことと考えることを強調しているといえる。それは、ティリッヒの著作の随所に出てくるが、例えば、「われわれの実存の究極的な根拠また意味への関係において健全になる(癒される)この行為こそが、人格のすべての方面、すなわち靈魂と精神と身体とのうえに作用をおよぼすのである。」(D.s. 266, D' p. 253~p. 254)とか、「すべての治療の最終目的は、人格の統合(Integration der Persönlichkeit)である。」(D.s. 280, D' p. 270)とか、「われわれに究極的にかかわるものを経験することによって集中化した自己がつくられることが、人格のすべての次元における治療の力を発動させる。(Die Erschaffung eines zentrierten Selbst durch die Erfahrung dessen, was uns unbedingt angeht, heilende kräfte in allen Dimensionen der Person zur Wirkung bringt.)<sup>9)</sup>とかの箇所がそうである。速効としての治療ではなく、正攻法としての治療は(そしてこれが身体的次元においても心理的次元においても精神的次元においても健康であるということなのであるが)、結局、信仰と人格の中核の問題に帰着するのである。従って、後で述べることになるが、このことは、教育の問題に帰着することにもなるのである。

最後に、救い(病からの癒しと隷従からの解放)にかかわる人々の人間関係について付け加えておきたい。(このことは、教育にもおおいに関連することである。)まずいかなる人も、救いを与える力をもっている、とティリッヒはいう。「誰もが、誰か他の人に対して、解放と癒しを与える力(liberating and healing power)をもっている。その人にとって、あなた

が祭司ということになる。私どもはお互いに祭司になるべく召されている。そして、もし祭司であるなら、医者でもある。医者であるのなら、カウンセラーでもある。そしてカウンセラーであるならば、解放を与える者でもある。救いの恩恵には、数えきれぬほどの段階があり、種類がある。」(C p. 115, C' p. 270)「医師の機能も牧師の機能もそれぞれに限定されたものではなく、牧師がいやす人でもありうるし、精神療法家は祭司でもありうる。人間は誰でもその隣人との関係においてこの両者でありうるのである。」(Bp. 77, B' p. 87)このことをまず確認しておいて、ところが救いが与えられるように無自覚的を含めて自覚的に援助する者(具体的には治療者や牧師や親や教師など)自身が、相手の救いのさまたげになることを、ティリッヒは指摘する。「強いキリスト教的性格というものには、深刻な曖昧さがつきまどっている。こういう人びとがないと、キリスト教は生きていかず、社会は存続しないであろう。しかし、他の多くのキリスト者たち、もしかしたら同じように強くなれたかもしれない人びとが、かえってこういう人びとによって痛めつけられ、逆に心の弱い、さらにはときには病んだ人間にさえされてしまうのである。(Many persons, who perhaps could have become strong themselves, are destroyed or reduced to mental weakness and often illness by them.)このような強さの人は、キリスト教と社会の担い手である。しかし、その子どもたち、妻や夫をはじめとして、キリスト者や、そうでない人びとのなかで、こうした人の犠牲になった人びとの数も知れないほどである。もしも、強い人と思われ、自分でもそう思っているのなら、目をさましてほしい。目をさまし、自分のまわりの人びとに、その人びとのありのままに生きることをやめて、私のように生きるなどと要求しないでほしい。自分の強さで、まわりの人を滅ぼしてしまうことになる。(You will destroy them by your strength.)」<sup>50)</sup>「私どもはみな、さまざまな強い人を知っている。おそらく自分の家庭や、友人や、社会の生活のなかでそういう人を知り、これを尊敬もしている。しかし、他方ではこの人たちには何か欠けているなど感じているものである。その欠けているもの、それは愛である。(略)愛を欠くと、強い人間は、弱者にとっての律法になってしまう。(Without love he who is strong becomes a law for the weak.)そして律法は、弱い人間をますます弱くしてしまう。(The law makes those who are weak even weaker.)絶望に追いこむか、

反逆の心、もしくは無関心を呼び起こす。(It drives them into despair, or rebellion, or indifference.) 愛を欠いた強さは、まず他者を、そして次に自分自身を滅ぼす。(Strength without love destroys, first others, then itself.)」(Fp. 153, F' p. 312) このことは、救いにおける、治療者や牧師と治療を受ける者や平信徒とのかかわりにおいてのみならず、教育における、教師と子どもとのかかわりにおいても非常に大切なことであるので、IIIにおいて、もう一度とりあげたい。

以上のように、治療者の強さが相手に対して律法となり、相手を痛めつけますます弱くし、そのことによって、救いのさまたげになっていることがあるが、逆に、治療を受ける者自身が救いのさまたげになっていることをも、ティリッヒは指摘する。「癒されるはずの人の態度が、癒しの妨げになるということである。悪しきものから救い出されたいという願いがなくては、解放は起こらない。癒しの力を切望することなくして、癒しは起こらない。しかもさらに、癒しの力をもつ者に信頼を寄せているときだけなのである。(Only when we trust in the bearers of healing power.) (略) 私どもは、健康よりも病を、自由よりも隷従 (enslavement) を選ぶことがあるかもしれない。むしろ癒されぬこと、解放されぬことを欲するにも多くの理由がある。弱い人間というものは、それなりに、自分の環境や、自分の家庭、友人たちに勝利する力をふるうことができる。それは、信頼とか愛とかを破壊してしまうかもしれない。しかし、その弱さそのものを通じて発揮される力に生きるその人自身には満足を与えるであろう。(略) 解放されることを望まぬ、もう少し別の種類の人びともいる。自由にされるということは、あるがままの現実に直面することを強い、人間としての最も重い重荷、つまり、責任ある決断という重荷を、自らになうことを強いるからである。(Because liberation forces them to encounter reality as it is and to take upon themselves man's heaviest burden: that of making responsible decisions.) 精神的な病に捉えられている人びとに、特にこのことはあてはまる。」(Cp. 118, C' p. 272~p. 273) このように、救いが実現されるためには、治療を受ける者からの協働がなければならないことも付け加えておきたい。

### III 教育に示唆する諸点

以上のような、ティリッヒの人間観や生命観、そして不安や病に対する考え、およびその克服としての救いに対する考えから、人間の問題、教育の問題、キリスト教教育の問題として、いかなる示唆が与えられるであろうか。

第一に、教育は人間観とかかわりなくおこなうことはできない。教育は人間観の追究であるともいえる。そういう意味において、ティリッヒの確かな人間観は、教育に貢献するものがあるのである。ティリッヒの考える、「人間は身体的、心理的、精神的次元の統一的存在である」という人間観は、人間における心理的次元と精神的次元とを区別することによって、心理的次元と精神的次元とを正しく位置付けることによって、両者を不用意に混同しないで、そのことによって逆に他の次元の必要なことを明らかにしてくれると思う。このことは、教育においても、心理的なことがらと精神的なことがらとを一括してしまわないで区別することの適切であることを示唆してくれていると思う。教育にかかわっている者は、(そして日本人は、) 不用意に、心理的なことがらと精神的なことがらとを混同しているのではなからうか。違いを明らかにすることによって、逆に両方の次元の独自の必要性を認めることができるようになるものであると思う。

第二に、実存的不安と病的不安に関連することであるが、不安が実存的不安の範囲内にくいとめられるならば、子どもの不安は問題としてとりあげなくてもよい。しかし、実存的不安は病的不安になろうとするし、また、問題の所在でも指摘したように、現代は不安や病の気分がおおっている。ということは、子どもの病的不安にも、教師は、たえず眼を注いでいなければならない。繰り返すならば、現代は、病的不安にも眼を注がなければ、子どもの教育にたずさわれなくなっているといえよう。

第三に、病にかかわって、次のような示唆が与えられるのではあるまいか。病には、身体的次元の病、心理的次元の病、精神的次元の病とがあるが、それらはお互いにつながりがあるし、そして、つながりがあることから、現象としてあらわれている病(例えば、頭痛、腹痛、吐き気など)が必ずしも現象と同一の次元の病ではなくて、他の次元の病が原因となっていることもあることを、医者はもちろんのこと、親や教師は、心にとめておかなければならない。現象としての病と原因となっている病では、病の次

元が移動していることがある。そして、病の発見には、医者やカウンセラーや牧師や親や教師の協力体制がなければならない。

第四に、救いということばを耳にすると、何か非常な問題をかかえていないと考える必要がないと連想しがちであるが、そして信仰だけのことであると連想しがちであるが（もちろん主として信仰のことであるにはちがいないが）、従って、人間の問題や教育の問題と関係がないと思いがちであるが、決してそうではない。救いは、身体的にも心理的にも精神的にも生じうるし、最終的にはまとまりのある存在、人格の統合 (Integration der Persönlichkeit) の実現であるからである。何よりも人格の中心が集中していることが、何よりもまとまりある救いになる。だとすれば、救いは、結局、信仰と人格の問題に帰着する。人格の問題になるとすれば、とりもなおさず、教育の問題になるのである。(人格の問題を、教育においてよりも、より徹底的な形で追究するのが、信仰である。このような形で、信仰と教育は、人格の問題を、追究しているのであるといえると思う。)

さらに、治療に関して (治療になると、主としてカウンセラーや医者の仕事になるのであるが)、一つの次元における治療は、他の次元における治療なくしては不可能である。このことは、治療は常にまとまりある人間 (人間は多次元的統一的存在であること、また、あらねばならないこと) との関連において治療がなされなければならないこと (全体的治療) の大切さ、また、部分的治療には弊害があること、また、横のつながり (医者、カウンセラー、牧師、親、教師など) が大事であることを示唆しているといえると思う。

第五に、救いのさまたげとなっているものとして、強さで相手とかかわる人間の存在を、ティリッヒはあげている。もしかしたら強くなれたかもしれない人を、逆に、痛めつけ心の弱い人間、ときには病んだ人間にさえしてしまう。自分の強さでまわりの人を滅ぼしてしまうことがある。強い人間は、弱者にとっての律法になってしまう。そして、律法は、相手をいかさないのみならず殺してしまう。教育において、教師と子どもとの関係において、教師は、律法としての強き人間として、子どもにかかわっていくことは避けなければならない。教師は、弱さに十分眼がひらかれていなければならない。

「不安や病とその克服としての救い」を手がかりとして、教育の問題な

いしはキリスト教教育の問題へのティリッヒの貢献と示唆を、私は、以上のように考えた。

以上は、昭和57年の第25回教育哲学会全国大会で、パウル・ティリッヒ研究 (VI) 一説教集を手がかりとして一と題して口頭発表した原稿に、加筆したものである。

(注)

- (1) Paul Tillich, "Die Bedeutung der Gesundheit," Die Religiöse Substanz Der Kultur, S. 289~S. 290 ティリッヒ著作集第七巻 白水社 p. 282~p. 283 この論文において以後この論文を引用する場合は、A (邦訳の場合は A') であらわすことにする。
- (2) Paul Tillich, The Courage to Be, p. 41 ティリッヒ著作集第九巻 白水社 p. 51 この論文において以後この著作を引用する場合は、B (邦訳の場合は B') であらわすことにする。
- (3) Philip H. Phenix, Realms of Meaning, p. 31~p. 32
- (4) フランクルも、『意味への意志 The Will to Meaning』の中で、ノイローゼにも身因性ノイローゼ、心因性ノイローゼ、精神因性ノイローゼがある、といている。
- (5) Paul Tillich, "Do not Be Conformed," The Eternal Now, p. 144 ティリッヒ著作集別巻一 白水社 p. 300
- (6) Paul Tillich, "Salvation," The Eternal Now, ティリッヒ著作集別巻一 白水社 この論文において以後この論文を引用する場合は、C (邦訳の場合は C') であらわすことにする。
- (7) Paul Tillich, "Die Beziehung zwischen Religion und Gesundheit," Die Religiöse Substanz Der Kultur, S. 247 ティリッヒ著作集第七巻 白水社 p. 230 この論文において以後この論文を引用する場合は、D (邦訳の場合は D') であらわすことにする。
- (8) Paul Tillich, "Seelsorge und Psychotherapie," Offenbarung und Glaube, S. 322 ティリッヒ著作集第六巻 白水社 p. 342~p. 343 この論文において以後この論文を引用する場合は、E (邦訳の場合は E') であらわすことにする。
- (9) Paul Tillich, "Der Einfluss der Psychotherapie auf die Theologie," Offenbarung und Glaube, S. 334 ティリッヒ著作集第六巻 白水社 p. 356
- (10) Paul Tillich, "Be strong," The Eternal Now, p. 149~p. 150 ティリッヒ著作集別

卷一 白水社 p. 307~p. 308 この論文において以後この論文を引用する場合は、  
F (邦訳の場合は F') であらわすことにする。

(1982年11月3日)